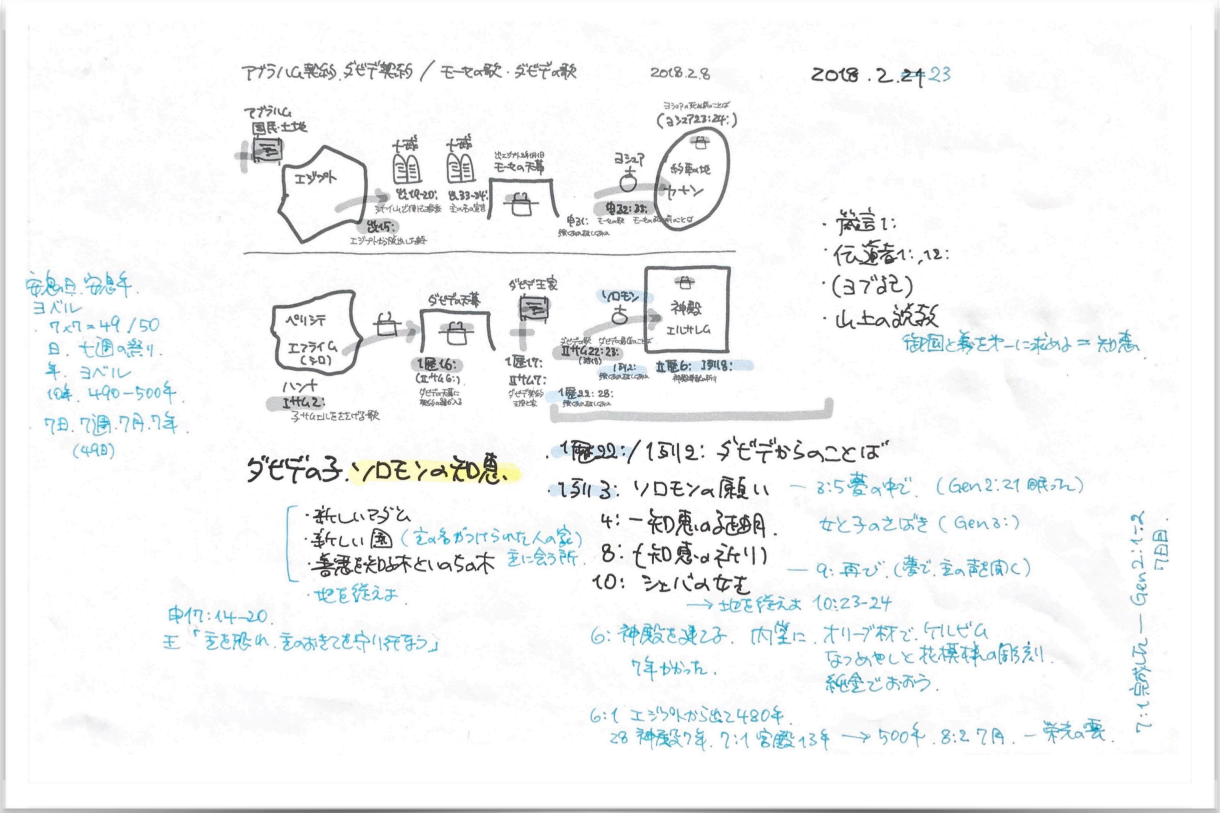
１列王記３章

ソロモンの知恵



ソロモンの知恵、ソロモンには知恵がありますということが、いろいろなところで言われているものですけれども、「神殿が建てられる、ダビデの契約に従って、その子ソロモン(ダビデの子)が神殿を建てます。」というストーリーの中でこの知恵のストーリーが出てきます。

列王記の3章にいけにえをささげた時、まだ神殿が建てられる前ですけれど、ギブオンで生贄を捧げた時に夢の中で「何を与えようか、願え。」と神様が言ってくださいます。「何を与えようか、願え。」という言い方は、王様が何でも祝福を与えるぞという時の言い方のようです。エステル記などを見るとわかります。その「何を与えようか、願え。」と言ったことに対してソロモンが答えるところです。

「このおびただしい民をさばく知恵はない。善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれもこのおびただしいあなたの民をさばくことができるはずはない。」ということを言って、「この願いは主の御心にかなった。…あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たち

の中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。また、あなたの父ダビデが歩んだように、あなたもわたしのおきてと命令を守って、わたしの道を歩むなら、あなたの日を長くしよう。」

この神様に何を願うのかと言われた時に、富ではなくで、誉れではなくて、民をさばく知恵をくださいということを願ったわけです。それがソロモンの知恵であるということなのです。

ソロモンが知恵を与えられた、その知恵のへりくだって求めた善悪をわきまえる、善人悪人をさばく知恵というものを求めているのですが、この求めていること自体は、特別にソロモンがほかの人にはない知恵を持っていたというよりは、忠実だったということがあらわされているものだと思います。

ダビデがソロモンにその働きを相続するところは、家を建てるその約束の人はあなたですということを、年老いたダビデが確認するところです。第1歴代誌22章にあります。

男の子が生まれる、彼は平和の人である、平安である、平安である、静穏を与える、それでシャロームという名前があるこの平和のダビデの子が家を建てますというところで、ソロモンにこう言います。「ただ、どうか、主があなたに分別と知恵を願い、あなたをイスラエルの上に立たされるとき、あなたの神、主の律法をあなたに守らせてくださるように。あなたがもし、主がイスラエルについてモーセに命じられた定めとおきてとを慎んで守るならば、あなたは栄えるであろう。心を強くし、勇め。恐れてはならない、おののいてはならない。」ここで、ダビデは知恵が与えられるようにということを話しています。それによって、イスラエルが平和となる。そのモーセの律法を守り行う。これが知恵だということを話して、その知恵を求めなさいということを話します。

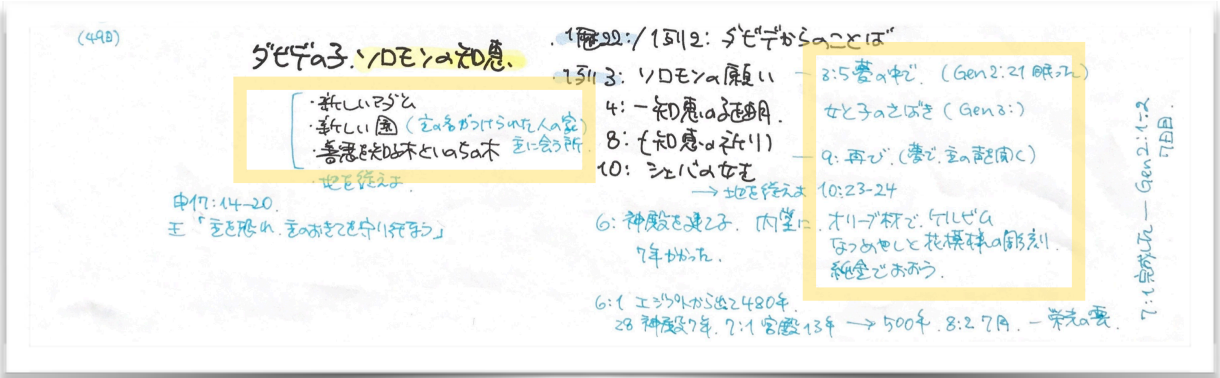
第1列王記の2章のところにも、死ぬ日が近づいた時に…ということが書いてありますね。「強くあれ、雄々しくあって、主の道に歩みなさい。心を尽くして神様の道を歩みなさい。」これが、ソロモンが神様に何が欲しいのか願えと言われた時に求めたもの。

これは、誠実と広義と公正を行うもの。神様がアブラハムを選んだ時に、公正と広義を行わせるためというように言っているように、公正と広義を行わせるというのが、王様がなすべきこと、支配者がなすべきこと、地を従える者がなすべきことである。それを第一に行うならば、地に平和をもたらす、地に神様の祝福をもたらすということが、ダビデがモーセに言われたことをわかっていたように、そのことを相続している。その相続されたことを忠実に神様に答えているということが、神様の与えてくださった知恵であるというところがソロモンの知恵ということの最初の出だしです。

その話の後に、二人の遊女が来るんですね。それで、王の前に立ってさばきを求める。そして、そのさばき、子供を分けますというさばきを聞いて、みんなソロモンを恐れる。神の知恵が彼のうちにあるということを見ます。そして、知恵のあるさばきをするために、誰がどの役職に就くのかという、人を見る知恵があるわけですね。さばきをするときに誰をリーダーにするのかということに一番知恵が要るということだと思います。

それで、その知恵は全世界に広く広がっていくというのは、シェバの女王のところで特にわかります。(第1列王記)10章のところです。シェバの女王は主の名にかかわるソロモンの名声を聞いた。ソロモンのもろもろの知恵、宮殿、食べ物、けらいたち、そういうものを見て、(シェバの女王も知恵があります）自分の国で聞いていたその知恵は、半分も知らされていなかった。その知恵と繁栄は、はるかにまさっている。その知恵と繁栄は、神様から来たものだということがわかっています。主は永遠にイスラエルを愛

しているがゆえに、あなたを王として公道と正義を行わせられる。主に愛されているものなのだということを他の国々の人はソロモンの国の栄光を見て驚く。その名声は全世界に広まったということになります。



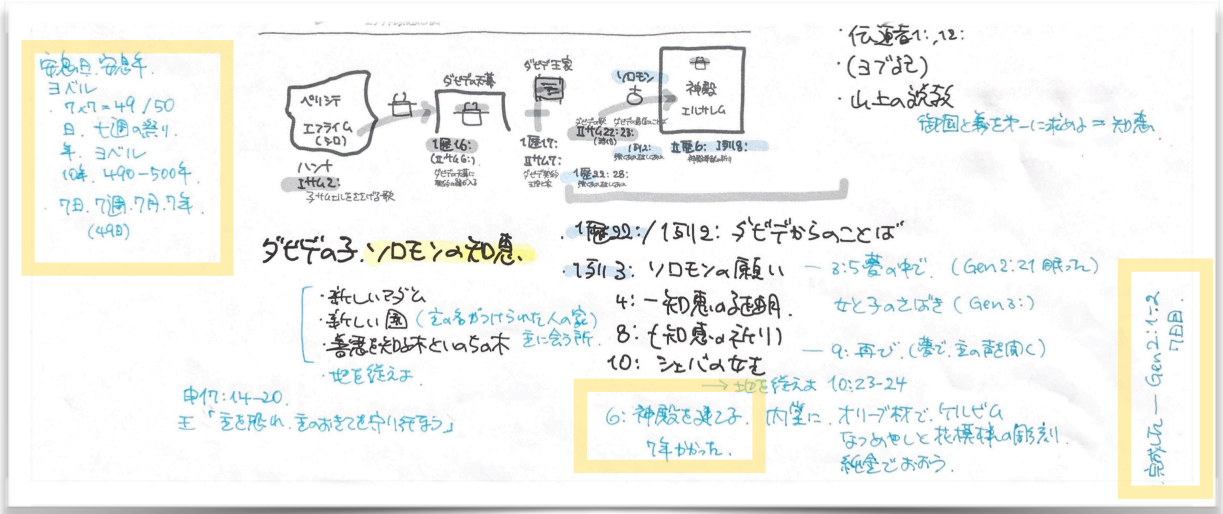
このソロモンの知恵、その知恵のストーリーを見ると、新しいアダムなのだということがいろいろな箇所を見てわかるかと思います。新しい神殿、ソロモンが建てた神殿は、破壊されてしまった、捨てられてしまったエデンの園、捨てられてしまったシロの幕屋をもう一度作ってエデンの園が回復するというところです。

エデンの園が回復するところは、いろいろなところにそのしるしがあると思いますが、例えば、ソロモンに神様が何が欲しいか願えと言っているのは、夢の中です。創世記で、女が与えられるところで、一度アダムは眠ります。深い眠りに陥ったあとにその願い…願っているかどうかそこではわからないかもしれませんけれども、動物たちに名前をつけた時に、ふさわしい者がいないということを思うように導かれる。ふさわしい者を求めるという心を導かれて、それで、与えられるということです。

知恵があるということを証明する二人の遊女が出てくるところは、女とその子です。女の子どもとサタンの子どものような戦いがそこにあります。

そして、もう一度、神殿を建てて祈りを捧げると、再び、神様の声を聞くという箇所もあります。声を聞いて従うので、「地を従えよ」という命令を成就しているというのがシェバの女王のところで、地を従えるということが成就しているというのがわかると思います。

建てている神殿の中がどういうものがあったかというのが、6章にあります。オリーブ材でケルビムの彫刻を作ります。そして、なつめやしと花模様の彫刻があって、純金で覆っている。エデンの園に純金がありました。豊かな実を結ぶものたち、木がありました。それとケルビムがいます。これは新しい園だというようなこともわかると思います。



神殿を建てるのに7年で建てました。エジプトから出て480年経って建て始めて、神殿を7年、宮殿を13年、全部足すと500年。栄光の雲がその神殿に来ます。それが7月ということです。建て終わったというのが7章1節にありますけれど、「完成した」。創造の7日目に完成したと言われます。

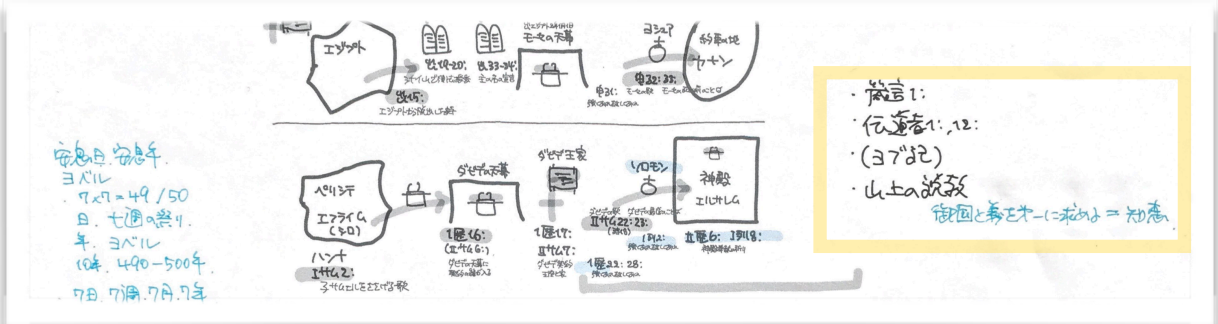
7の500は、ヨベルの年の大きなものみたいなものだと思います。7日目の安息日、7週の祭り、7月の仮庵の祭り、7年の安息年、49日目が7週の祭り、49年と50年がヨベルの年、その10年単位でいうと、490年と500年、これが大きな大きな安息年ということです。日にちのサイクルでいうと一番長いものですけれど、この大きな大きなヨベルの年に神殿が建てられて、完成が宣言されて栄光の雲、栄光が満ちあふれるという、これが神殿を建てたところ。本来のアダムがなすべき平和が、この平和の都に満ちあふれるのにふさわしい仮庵の祭りの時です。7月の7日間の祭りを2回やったというふうに書いてあります。神殿を捧げるために7日間、仮庵の祭りで7日間。大大大仮庵の祭りのようなものですね。神様の住まいを捧げるところが、そのような日にちでもわかるかと思います。これが、神殿が建てられた日にちです。

神殿をささげた時の祈りは、別に分析しました。ダビデに約束された王と家の約束が成就しています。7度罪を赦すというような祈りになっています。そして、そこに目と心をおいてくださいますけれども、エデンの園も神様に会う場所でした。善と悪の知識の木があったわけです。善と悪をさばく知恵を求めたわけです。このソロモンの知恵を見ると、アダムは何をすべきだったのかということがわかると思います。創世記のところだけを見ると、取って食べてはいけないということはわかるけれども、何をすべきだったのかということは、ちょっと曖昧な感じがしますけれど、こういう箇所を見ると、こうすべきだったのだということが肯定的にわかると思います。

申命記17章14節からのところに王についての命令があります。その王についての命令のところにもこうあります。「主を恐れ、主のおきてを守り行う」これが王に与えられている命令です。「主を恐れて主の命令を守る」これが善と悪を知るという道だったのです。善悪の知識の木の実を主を恐れて守って食べない。食べないということは、主を恐れる、それが知恵なのですということを悟る。(悟る)ならば、富と誉れと栄光が与えられる。長い命を与えられる。これがいのちの木です。

第1列王記3章のところで、まず、善と悪の知識の木の実のテストでソロモンは合格します。合格したので命を与えられる。その知恵がいのちへの道、シャロームへの道、平

和の祝福の道である。それによって、富、栄光、繁栄、誉れ、このような祝福が与えられる。王としての責任を果たすなら、本当の休み、本当の永遠の安息、聖いものになる。7日目の安息日の祝福を得られる。本来、創造された時の働きの祝福も与えられるということが、この順番で見て、アダムが何をすべきだったのかということが、それによってわかると思います。



ソロモンが書いたと言われる書物があります。箴言。ダビデの子ソロモンの箴言。これは、人に知恵を与えるもの、悟らせるもの。賢い行いと正義と公正と公平の教訓を受けさせ、若い者(1列王記3「私はまだ小さい若者で出入りすることを知りません」とソロモンは言っています）に知恵を与えるため。これが、箴言を与えている意味です。

そして、年老いてから書いたであろうと言われている「ダビデの子、エルサレムの王である伝道者の言葉」これは、ソロモンが年老いてから言った言葉（ソロモンとは書いていないですけれど）、ソロモンのような人、もしくはソロモンが書いた言葉ということで見ると伝道者は知恵があった。そして、知識を民に教えました。神を恐れその命令を守れ、これが、人間のすべてだ。すべて隠れた事を善と悪とともにさばかれるからである。これを主を恐れる、これが知恵ですということを伝道者の書でも同じように教えています。

似ている書物でヨブ記というのがあります。ヨブ記はソロモンではないのですけれど、このヨブは、東の人々のうちで最も大いなる者、富豪だったのです。東の人のうちの富豪、ソロモンのような偉大な力ある人。この人は全く正しく神を恐れて悪から遠ざかっている。それはサタンもわかっている。それで、ヨブ記の28章のところに、知恵はどこにあるのか、悟りはどこにあるのか。そして、その知恵はエデンの園にある祝福よりも偉大である。目に見えるエデンの園にある宝物よりも偉大であるその知恵、真ん中にあるその知恵の木の話を思い出すわけです。知恵はどこにあるのか。「主を恐れること、これが、知恵です。悪を離れること、それが、悟りである。」これは、もともとヨブが知っていたことです。主を恐れること、悪から離れること、このことを知恵だというように教えていますので、ヨブ記を見てソロモンを思い出すということです。

富豪ですから。最後にもうひとつ。山上の説教の中にソロモンが出てきます。何が欲しいのか願えという箇所もありますけれど…「あなた方は神と富とに仕えることはできません。いのちの心配をするな、富の心配をするな。」「栄華をきわめたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」その栄華の中のソロモンでさえも、神様が花を着飾ってくれるほど繁栄していないよというような言い方をします。面白いですね。ここで、ソロモンと出てきますから、繁栄している話は、ソロモンを連想するように書いてあります。ソロモンを連想して、神と富、富ではなくて、神を第一にしたソロモンのことも思い出すわけです。

それで、異邦人が求めているものはこういうもの(何を食べるか、飲むか)ですけれども、天の父がそれは必要だとわかっていますから、「神の国とその義を第一に求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて与えられる。」ということ言うと、神の国とその義というものは…神の国とその義はどうやって求めるのかというと、王様に、善と悪をさばく知恵を与えてくださいと(願う)。私たちの主は、新しいソロモンであるイエス様は、天で善悪をさばいている。そのさばきを成してくださる神様の国と義を第一に求めるならば、永遠のいのちが与えられる。永遠のいのちが与えられるその心配をするな。まず、「主を恐れて、主の命令を守ることを求めなさい」というように言われていますので、このマタイの山上の説教の中でも同じことを(言われています)。「神の国とその義を第一に求める」ということは知恵です。

知恵の教えだということ思いますけれども、これは、神の義、神のあわれみです。神殿を捧げた時の祈り。これは、知恵の祈りだということが言えます。善と悪をさばいているという言い方はできますけれど、あまりさばいているという感じはしないです。罪を赦してくださいという憐れんでいる、あわれみのさばきをしてくれる。これが、ソロモンの知恵です。

アブラハムもとりなしの祈りをしてくださいました。イエス様も、もちろん、私たちのためにとりなしの祈りをしてくださる。これが、善悪をさばく知恵のある人の祈りですので、神の国とそのあわれみがなされることを第一に求める。これが、神様が王に与えてくださった、イエス様に与えてくださっている知恵ですけれども、私たちもイエス様と共にこの地をさばくということですので、この知恵がソロモンに与えられた知恵。新しいエデンの園に与えられている知恵を求めるということをここから学べるものだと思います。